

Mr. Bassman (ベースマン列伝) Vol.32

ジャズにおいてベース弾きとは、縁の下の力持ち、水先案内人といったやや日陰の存在。おまけに、ウッドベースなら持ち運びも大変……。だが、黙々とベースをウォーキングさせ、バンドをスイングさせることに魂を注ぐベースマンが、一度化けの皮を剥くともの凄い名演・名盤が生まれるのだ。このコーナーでは、そんなジャズ・ベースマンの偉業を称えるとともに、ジャズ・ベースの素晴らしさを伝えていきたい。

Dave Holland【デイヴ・ホランド】



Photo by Tom Marcello

Profile

1946年10月1日、英国ワーウィックシャー・ウォルパーハンプトン生まれ。幼少期よりウクレレやギター、ベース等、弦楽器に興味を示し、10代の頃はロック・バンドで活動。64年にロンドンの交響楽団のベース奏者に師事。65年から68年までロンドンの名門「ギルドホール音楽学校」でクラシックとジャズを学ぶ。ロンドンのクラブ・シーンで頭角を現し、英国に来ていたマイルス・デイヴィスにジャズ・クラブでのプレイが気に入られ、直接スカウトされる形で68年にマイルスのグループに参加。マイルスの名盤『イン・ア・サイレント・ウェイ』(69年)、『ピッチェズ・ブリュー』(70年)のレコーディングに参加し、一躍その名を広く知られるようになる。70年にアンソニー・ブラクストン、チック・コリア、バリー・アルトシュellと「サークル」を結成(翌71年解散)。70年代初期にはスタン・ゲッツ、セロニアス・モンク、サム・リヴァース等と共演。72年に初リーダー・アルバム『Conference of the Birds』発表。75年にはジョン・アバークロンビー、ジャック・デジネットと「ゲイトウェイ」結成。80年代以降も自身のグループを率いてのライブ活動の他、リーダー・アルバムもコンスタントに発表している。サイドマンとしても数多くのアーティストのライブやレコーディングに参加。66歳となった現在も健在振りを見ている。

職人的ベースマン魂を感じさせるクールな名ベーシスト!

母国イギリスのジャズ・クラブでの演奏を見たマイルス・デイヴィスに誘われ、1968年にハービー・ハンコック、ロン・カーター、トニー・ウィリアムスと入れ替わる形で、チック・コリア、ジャック・デジネットと共にマイルスのリズム・セクションに加わったデイヴ・ホランド。けて、ド派手なプレイを見せるわけではないが、エレキ・ベースも披露する等、職人的なベースマン魂を感じさせるプレイと佇まいはクールでいぶし銀の存在感を放っていた。1970年代の「サークル」や「ゲイトウェイ」での活躍も素晴らしく、自身のバンドでは変拍子や複雑な構成を駆使して、個性的な楽曲と作品群を発表し続けている。近年は自身で運営しているレーベル「Dare 2 Records」からリーダー作を届けてくれているが、今後の作品と共に自身のバンドでの来日にも期待したい。【オフィシャル・サイト：<http://www.daveholland.com/>】

DH's Great Albums

1970年代から現在に至るまで、主に「ECM」、「Dare 2」からコンスタントに自身のリーダー作を発表しているデイヴ・ホランド。下記以外の作品も個人的でお薦めです。

Music from Two Basses

Dave Holland / Barre Phillips

(ECM Records : ECM-1011)

1971録音。“ベース即興のゴッドファーザー”と称されるパール・フィリップスとのベース・デュオで挑んだ名盤。デイヴはチェロも披露している。

ピッチェズ・ブリュー

マイルス・デイヴィス

(ソニー・ミュージック : SICP-10089-90)

1969年録音。デイヴ・ホランドの名を広めるきっかけとなったマイルス・デイヴィスの名盤。「フュージョン」というジャンルを確立した革命的作品。

Conference of the Birds

Dave Holland Quartet

(ECM Records : ECM-1027)

1972録音。サム・リヴァース、アンソニー・ブラクストン、バリー・アルトシュellとのカルテットによるデイヴ・ホランドの単独名義での初リーダー作。

Live From Zeit-Musik Festival Freiburg 1986

Dave Holland

(Arthaus Musik : ATH-107049) [DVD]

1986年ドイツのフライブルクで行われたデイヴ・ホランド・クインテットのライブを収めた映像作品。ステイブ・コールマン等が参加。全5曲。

